

第一章 漢字に親しませよう



第Ⅰ部 漢字は才能を開発する

〈一〉 幼児と漢字

こんなに覚えやすい文字はほかにない

幼児への漢字教育に対する最大の非難は、「まだかなも読めない幼児に漢字とは乱暴すぎる」という論です。しかしこれは、漢字という3個のは難しいもの、子供にはわからないもの、という固定した考えから出ているのです。

ところが私は、実験を通して、幼児は、かなより漢字の方をよく覚えることを確かめております。三歳の子に漢字を読めるようにすることは、六歳の子にかなを読めるようにするよりもやさしいのです。

世界のいろいろな文字のうちで、幼児にとって、漢字ほどやさしく覚えられる文字は、ほかにはないように思われます。なぜそうなのかは、あとで述べますが、とにかく、最近の実験で、最も容易に漢字を覚える時期は、三〜四歳のころであることがわかりました。つまり、漢字教育をしている各幼稚園からの報告は、いずれも「四歳児の方が五歳児よりも抵抗なく漢字を吸収する」と記録しております。

記憶の仕方には、論理的な記憶の仕方と機械的な記憶の仕方があって、機械的な記憶は、三〜四歳の幼児期が最高で、この時期を過ぎると、あとは衰える一方だと言われますが、言葉や文字は、論理的な記憶よりも主として機械的な記憶によっているので、殊に日常よく使われる言葉や文字は、幼児期に環境から自然と吸収させるように配慮するのが、いちばんいい方法なのです。

教えるのではなく自然に覚える

それにしても。そんな小さい子供に漢字を教えることは。早過ぎて害があるのではない



かという声も聞きます。たしかに、いやがる子供に無理に詰め込むのだしたら、害もあります。しょうし、なによりまず、子供が受けつけますまい。けれども、幼児は本来、与えられたすべての環境を栄養として育つのです。それは、自然から与えられた生命力——「内なる力」の働きです。この育つ力に呼びかけ、そしてその育つ力が応じるのです。しかも、最も適切な時期にそうするのですから、早過ぎるということは決してありません。

あとで、人間に脳の働きについて述べます

が、とにかく、環境からの刺激を受け、それに反応して育つ働きは、生後の三年間で一応完成されてしまっています。しかも、視覚的なものを吸収する能力は、一生のうちで三歳ごろがほとんど最高なのです。そして、もし刺激が多すぎたり、吸収するに耐えない場合には、吸収を中止する——受けつけることをやめますから、大人が心配するような負担過剰ということとは起こりません。空腹ならどんどん食べ、満腹すれば自然に飲食をやめる、それと同じです。その意味でも、無理やりに教え込む教育は、満腹したものの口を強引にあけて詰め込むようなものですから、これは大変な弊害をとまなうにちがいありません。殊に漢字教育と言えは、すぐに詰め込み教育を連想するほど、今までの多くは詰め込み式でした。しかし、そうではなくて、幼児が喜んで覚えてしまう方法を知っていただこうと思います。

そこにはなんの負担もかからない

物事を記憶するには、第一に「関心」第二に「反復」が必要です。とりわけ「関心」は、記憶のための絶対必要条件です。「心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず」で、関心のないことは、いくら反復して見せ、聞かせたところで、心の目、心の耳が見聞きしていないのですから、記憶されるはずがありません。

人の顔でも、関心のない人の顔は、何回あっても記憶に残りませんが、強く関心を持つて見た人の顔は、たった一度だけの経験でも、心に強く印象づけられて記憶に残ります。しかし、どんなに強い関心を持って、心に印象づけられ記憶されても、ただそれだけで二度と経験することがなければ、その記憶はだんだん薄れていきます。

したがって、記憶を必要とする学習では、まず、記憶すべき物事に、子供の関心を持たせるように仕向ける（その方法はあとに出てきますが）ことが第一で、第二には、その記

憶を保たせるために、反復して経験させることが必要です。

一般に、記憶できたと思うと、途端に反復をやめてしまいがちです。しかし、反復は、記憶するためにも必要ですが、それ以上に、その記憶を保持するために必要なのです。

今の脳生理学では、三歳ごろまでの幼児の脳は、大人の脳よりも強い吸収力がある、と考えられています。ただ、その吸収力は、耳目に触れるものを、なんでも覚え込むというもので、取捨選択して覚えるという働きはありません。

つまり、「理解して覚える」という働きは、三歳ごろから後に、だんだんと発達していく能力なのです。「理解して覚える」ということは、裏返せば「理解できないと覚えられない」ということです。何でも吸収するという覚え方は、四歳ごろまでが絶頂で、あとは次第に衰えていくと考えられます。

ですから、日常生活を成り立たせる「言葉」や、それに関係のある「文字」などは、

「理解して覚える」段階に入る前の、何でもかんでも吸収する幼児期に、できるだけ覚えさせた方がよいのです。

幼児が何の努力もせず、負担も感じないで、つまり「内なる力」によって覚える時期に、多くの言葉や文字を覚えさせることは、幼児のその後の生活に非常に役立ち、知的発達の上に著しい効果を発揮します。

覚えたい意欲におとなは手助けを

漢字の場合、四歳ごろの子供は、ひとたびこれに関心をもつてながめますと、ただそれだけで覚えてしまいます。

わたしは、幼稚園をまわって、園児たちによくお話をしますが、話しながら、その話に出てくる言葉を、さりげなく黒板に書きつけていきます。たとえば、山・川。柿。実



園児にお話をしながら黒板に漢字を書く著者

というようにです。

すると子供たちは、「おや、何を書いたんだろう」という顔つきでそれをながめます。「何だろう」と、つぶやく声も聞こえます。しかし、わたしはそしらぬ顔で話を続けます。

話の中に、もう一度「柿」が出てきた時、「柿が……」と言いながら、黒板の柿という字を指さします。すると、「あれが柿という字か」とつぶやく声が聞こえます。つぶやかなくても、多くの子供たちは、柿という字を目に焼きつけてしまうのです。

やがて話が終わって、黒板の漢字を読ませてみますと、十字から二十字くらい漢字だったら、たいていまちがいなく読めるようになっていきます。それらの漢字を次の日読ませてみますと八十パーセントくらいの子供がちゃんと読むそうです。

この際大事なことは、話に先立って、「漢字を書きますよ」とか「漢字を教えてあげます」とか言わないことです。

話を聞くことに一心になって、幼児の目が話し手に集中しているなら、さりげなく書かれた漢字にも必ずひきつけられて見つめるに違いなく、そうすれば、幼児はその漢字の形を頭に刻み込まずにはおきません。

ですから、無論、黒板に書いた山や川などの漢字を「覚えなさい」と言う必要はありません。殊に、四歳を過ぎた幼児には、「教え込もう」という態度をもつと、かえってやる気をおさえることになり、そっぽを向かせてしまうことになりがちです。「漢字を覚

えようと覚えまいと、そんなことは問題ではない」という気持ちでやった時に、かえってよく覚えてくれるものです。ところで、三歳ごろまでは、何でも素直に受け入れていたものが、四歳ごろになると、やる気を出して、自分なりの考えて物事を取り入れるようになります。つまり、やる気を育て、やる気に訴えるようにしなければいけません。それにはどうすればいいでしょうか。

〈2〉幼児の意欲

自発的な意欲を育ててこそ

世の中には、やる気を育てるところか、反対に、おさえこんだり、ねじまげている親がなんと多いことでしょう。ただ親の意思で子供を動かそうとします。すると、頼もし

子供なら必ず反抗するはず。そうであることが、四歳以後の子供の本来の姿だからです。

にもかかわらず、こういう時期に、いつまでも親の意思を一方的に押しつけていると、子供は反抗のかたまりになるか、いつまでたってもやる気のない、頼りない子供になってしまいます。親の意思どおりに動くような子供を「素直な子供」と喜んでいては、とんだまちがいです。

それは「無気力」というものです。私は、ほんとに「素直な子供」というのは、理解力があり、実行力に富み、子供なりに真剣に考え、自分に納得できて初めてそれを実行する子だろうと思います。

幼児はもともと「やる気」のあるものです。疑問があればほうっておきません。うるさいほど質問するのはそのためです。ですから、漢字があれば、それがなんであるか知ろう



幼児のやる気を育てることがなによりも大切

とし、そして質問するはず。親はこの質問を喜び、機をのがさず教えてやれば、幼児はたった一度でその漢字を覚えてしまいます。

ところが、漢字の質問などされると、たいていの親は、それに対して、学校へ行くようになればわかる、という言い方で、教えることを避けます。これでは、子供は漢字を覚える機会を失うばかりでなく、漢字への関心も失ってしまいます。

ほんとうの頭の働きは、知識を蓄えること

ではなくて、その蓄えた知識を使うことです。知識を蓄えるだけなら、あるいはやる気がなくてもある程度可能でしょうが、使うとなるとやる気がなくては使えるものではありません。

もともと、幼児は、三歳ごろから、ぼつぼつやる気の芽を出し、四、五歳になると、何かを求める活動が活発になるものです。何かを求めてそれが成功した時の快感が、また次に何かを求める気持ちを誘います。これがやる気なのです。

何かを求めてそれに成功した、それだけでもやる気は育ちますが、それを親に認められ褒められると、その成功の喜びは一層強まり、したがってやる気も一層強まります。

意欲のあるところに楽しみと進歩

昨年、ヴァイオリン指導で有名な鈴木鎮一先生からこんなお話をうかがいました。先生の幼いお弟子さんたちよりも、そのお母さんたちの方が熱心で、肝腎の習う子供にはやる気がない、ということがあるそうです。そういう子供には、一月でも二月でもヴァイオリンに手を触れさせないで、ただ皆の練習するのを見学させておくのだそうです。人間というものは不思議なもので、「してはいけない」と言われて禁じられると、かえってそれをしたくなるものです。ヴァイオリンを持つことを禁止された子供は、日ごとに「持きたい」「ひきたい」という気持ちを強めていきます。そうしてひきたくてたまらなくなった時に、初めてヴァイオリンを持たせるのだそうです。もはややる気十分ですし、音を出すことができた喜びが、さらにやる気を増す、ということになります。ですから、苦痛をとまなう練習も少しもいとわずに、夢中になって練習します。進んで負えば重荷

も重からずで、自分から求めてする練習なら、その練習のつらさも決してつらくなく、苦痛も決して苦痛になりません。

このごろ、幼時から音楽教育を受ける子供が多くなってきましたが、多くは子供の気持に関係なく、ただ母親の気持だけで子供を叱咤激励してやらせている、というのが普通ではないでしょうか。しかし「やる気」のない練習では、いくらやらせても進歩がありません。いや、進歩がないだけでなく、音楽そのものがきらいになってしまいます。

漢字教育でも同じことです。母親が、子供に漢字を覚えさせたいとどんなに望んでも、子供にその気がなかったならば、どうすることもできません。ところが、母親は、「漢字に強い子は成功する」と聞くと、漢字を教え込もうと夢中になりやすいものです。

一体、教育というものは、子供を何かに夢中にさせることであって、教育に当たるものが夢中になっては、冷静を欠き、正しい判断ができないので、処置を誤って失敗します。

子供が求めるようになる条件をつくり、そして求めるのを待って、その機をのがさず教えてやれば、なにごとく一度で覚えてしまいます。

親というものは、子供に対して貪欲なものです。子供にとって少しでも有益になることだと思えば、あれをやらせたい、これもやらせたいと思います。それは親の情として自然でしょうけれども、教育にあたっては、もっと理性的でなければいけません。

いくらカツオブシが好物でも、食べる気がない時には、猫も顔をそむけます。人間である幼児が、望みもしないことに努力するはずはないのです。

ところが、親は、理屈ではそれがわかっていても、やはり自分の要求を子供に押しつけようとするをやめません。ここに、親が子供の教育に失敗しやすい理由があるのです。世界一の大教育者である孔子でさえも、わが子を教えることが少なかったのは、やはり「子を教えることのむずかしさ」を感じていたからでしょう。わたしたちは、このむずか

しさを常に心に留めておくことが必要だと思います。

第2章 漢字のすばらしさ



〈能力と国語力

科学・技術の進歩も基本は国語力

近ごろ。水平思考という言葉で有名なケンブリッジ大学の教授デボノ博士が、「イギリスではせいぜい数千部も売れば上出来と思われる技術書が、日本では十万分以上も売れる。この読書エネルギーは、やがて日本を世界一にするだろう」と言っています。

たしかに、明治時代の発展も、第二次大戦後の興隆も、共にこのエネルギーによるものだということができましよう。

日本人くらい書物や新聞雑誌をよく読む人種はありますまい。込み合う通勤電車の中でも、多くの人が何かを読んでいます。たとえそれがスポーツ新聞であっても、とにかく、階層の区別なく活字を読んでいる。これは諸外国には見られない日本人の日常の姿勢の

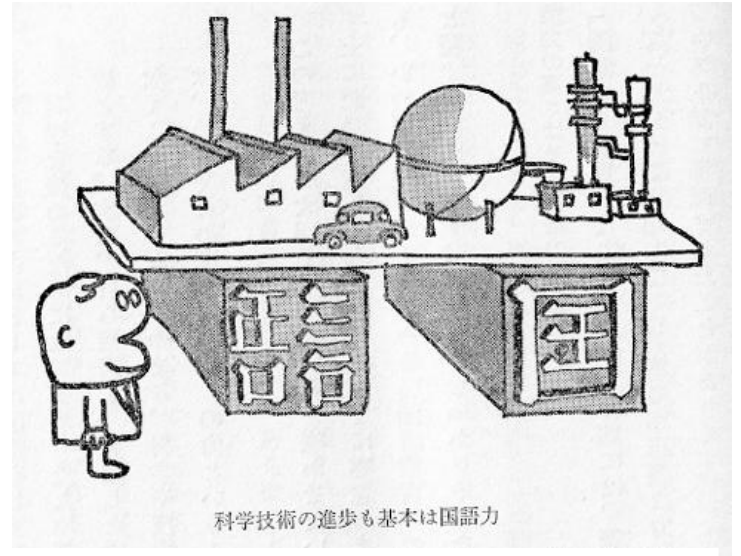
一つと言えましよう。

この特異性が、日本人の知識を向上させ、技術を向上させ、短時日の間に先進国の文明に追いつき、追い越させた、最大の理由だと言えましよう。

以前、朝日新聞に、『科学技術教育と国語教育の重要性』という題の社説が載ったことがあります。それは次のような要旨のものでした。

近ごろ、科学技術教育の必要性が叫ばれているが、それにつけても、その根底にある「国語」の教育の重要性を忘れてはならない。極度に正確な表現と理解とを要求する科学を学ぶには、細かい知識や技術そのものよりも、学問研究のための基礎としての国語をしつかり身につけることが肝要である。

科学を修めるためには、まず、先人の著述や記録を正確に理解する「読解力」を必



要とする。次に、自ら観察し、実験した所を、論理的に精密に記録する『表現力』を欠くことができない。つまり、科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、それぞれの国の『国語』の力というものがあるのだ。

この考え方は大切です。良い花を咲かせたい人は、花そのものには手をかけないで、まず土に肥料を施し、水を与えることに専念します。科学教育と言い、技術教育と言

うのも、いわば、豊かな土壌である『国語教育』の上に咲く花です。科学教育だ、理科教育だと騒ぐまえに、まず国語教育をしっかりとやらなければなりません。

能力の高さは国語力に比例

「国語の力が豊かなことと成功との間には、驚くほどの関連がある……あらゆる分野において」と書き出して、『言葉の不思議な力』という表題の文章が、リーダーズ・ダイジェスト誌に掲載されたことがあります。

アメリカの科学者 ジョンソン・オコナー博士が、人間工学研究所で、あらゆる職業から選んだ三十五万人以上の人を対象にテストした結果、多くの言葉の意味を正確に知っているということが、他のどんな特性よりも成功の原因である、ということを実証したのです。

博士は、中学生・高校生・大学生から工場勤務者、大会社幹部までテストを行い「地位の上下と収入の割合は、国語の力と正比例しており、また、国語の力は学校の成績とも正比例している」と述べています。

人は言葉でものごとを考えます。ですから、理解する言葉が多ければ多いほど、その人の思考の幅が広く、理解する言葉の深さが深ければ深いほど、思考の精密度も高い訳です。言葉を正確に豊かに使う人が、あらゆる方面で成功しているのは、考えてみれば至極当然のことと言わなければなりません。

ところで、デボノ博士を感じさせた「日本人の読書エネルギー」は、どこから生まれるのでしょうか。それは、よく言われるように、日本人の勤勉さからでしょうか。

勤勉さもさることながら、わたしは、日本人の持つ高い読書能力——国語力から生まれる、と考えています。

およそ、世の中に、読書能力さえあれば、読書ほど永続的で、楽しくて有益なものは他にありません。ただ、読書力が低いと、読んでも十分に理解できないので、読書が楽しめないのです。

わたしはむしろ、読書能力の高いことが日本人の読書エネルギーを生み出しているのであって、日本人が勤勉だと言われるのは、その結果だと思っています。

偉大な発明——漢字かな混じり文

では、日本人はなぜ外国人に比べて読書能力が高いのでしょうか。

その理由は、当然、日本固有のものの中になければなりません。つまり、わが国固有の表現法「漢字かな混じり文」にある、と思われます。日本語は、表意文字（実は、表語文字というべきもの）である漢字で書き表わすのが良い言葉と、表音文字であるかなで書き

表わすのが良い言葉からできています。漢字かな混じり文は、そういう日本語のために発明された、世界に類のない表現法で、これが読書能力を非常に高めているのです。

あとで述べますが、漢字は、直接言葉を表していますので、一目でそれが何を意味しているかを知ることができます。ローマ字やかな文字は、表音という手段によって間接に言葉を表すので、文字の目的である『表意性』の点では機能的にどうしても漢字に劣ります。しかし、表意性に優れた漢字でも、漢文や現在の中国語のように、漢字ばかり並びますと、決して世に安くありません。つまり、漢字とかなが適当に混じり合った『漢字かな混じり文』は、双方の特長を生かして読書をしやすくしています。そして、それが日本人の読書能力を高めているのです。

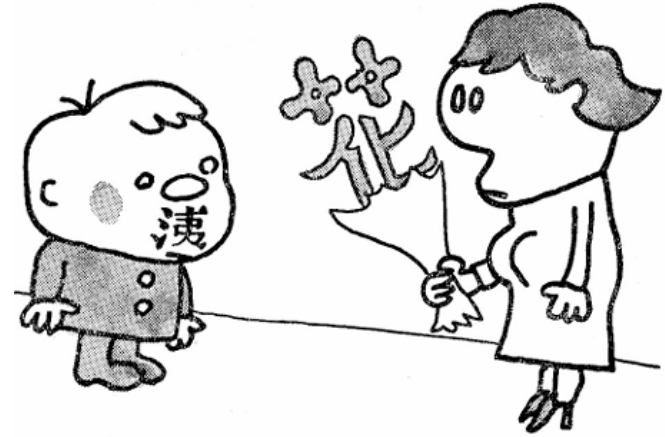
〈2〉漢字の偉力

漢字は一目で意味がわかる

名神高速道路が出来た時、道路標示に使う最もよい文字を選ぶために実験したところ、ローマ字で書いた場合、判断に十数秒かかり、かなで書かれたものは数秒、そして、漢字の場合は数分の一秒で読める、ということがわかりました。

国語に「ハナ」という言葉があります。「突き出たところ」というような意味の言葉ですが、草木の花も、顔の鼻も、同じく「ハナ」です。ところで、鼻から出るものを「洩」と書きます。

「ハナ」と書いたのでは、それがなにをさすのかはつきりしませんが、これを花・鼻・洩と書き分けると、一目ですぐに意味がわかります。それに「花」という字には、なんと



漢字は一目でその文字の意味を示す

なく美しい雰囲気がありますが、『洩』には、汚らしい雰囲気があります。見るからに胸が悪くなるような字で、ズルズルという音さえ聞こえてきそうな気がします。

このように、漢字というものは、それぞれの鮮やかな印象を秘めていて、一目見ただけで正しく早く、その文字が意味するものを呼び起こしてくれます。思想の伝達という機能を果たす上で、漢字ほど優れた働きを持った文字は、他にありません。

言葉は、録音しておかなければ口から出た

途端に消えてしまい、しかも、ラジオやテレビのような手段によらないかぎり、その伝わる範囲もごく近くに限られます。ところが、文字になりますと、時間的にも空間的にも、その効果がずっと大きくなります。

文字というものは、そういう機能を持ち、言葉の短所を補うものとして生まれたものですが、もう一つ注意すべきことは、文字が、言葉では精密に区別し、表現できない点まで表現できる、ということです。

先の例の「花」「鼻」「洩」もそうですが、「見る」「看る」「観る」という表記もそうです。これらは、英語の see, look, inspect, observe に当たる意味を表しています。つまり「見る」は「何気なくみる」ことであり、「看る」とあれば「みよう」して「みる」ことであり、「視る」とあれば、手落ちはないかと「注意してみる」こと、そして「観る」とあれば、「細かい点にまで心を配ってみる」ことであることがわかります。

ですから、「川をみる」という表現では、どういう態度で川をみるのかわかりませんが、「川を見る」「川を看る」「川を視る」「川を観る」と書けば、その川をどのように見ているのかがはっきりとわかります。

このように、言葉では不可能な点まで表現できるところに、漢字の、文字としての大きな特長があるのです。これが漢語の表記となりますと、一層その特徴がはっきりしてきます。

わたしは、六年生の教科書を見ていて、「こう水」という表記を目にした時、一瞬とまどいました。それは「洪水」のことだったのですが、わたしはその「こう水」を一瞬、「こうすい」と読んだのです。「こうすい」では、「香水」か「硬水」か「鉱水」になってしまいます。つまり、小学校ではこれらの漢字を教えないで、「こう水」という表記で教えているのですから、じっさいの「洪水」「香水」「硬水」「鉱水」という言葉を理解させるこ

とはできないのではないかと思います。

「こう水」という表記がこれら四つの言葉をあらわす、ということは説明してやることはできませんが、それでは子供にはとても理解できないでしょう。

ところが、この「こう」を洪・香・硬・鉱という漢字にすると、それぞれ明確な意味を持っていて、決して紛れることはありません。だから、漢字で学ぶことは、かなで学ぶよりも、ずっとやさしく能率的なのです。だから、漢字で学んだ子供たちは、「かなばかりの本は読みにくくて意味がわかりにくい」と言っているのです。

つまり、漢字を学ぶことは、概念を明確にすることであり、物の考え方をはっきりさせることになるのです。だから、「漢字の学習は頭脳を明晰にする」と言うことができます。

かなだけでは精密な思考ができない

「こう水」や「はな」「みる」という表記では、思考力が育たない。「洪水」「香水」：「花」「鼻」……「見る」「看る」……という表記で言葉を学習しないと、概念をはっきり理解することができず、言葉があいまいになり、精密な思考ができなくなる。だから、言葉を漢字で教える。——これがわたしどもの漢字教育なのです。

数年前、朝日新聞は『石井方式を考える』という社説を掲げ、「石井方式はよく『漢字を教える教育』のように言われているが、そうではない。『漢字で教える教育』なのである」と解説しましたが、いまでもなかなかこのように理解してくれる人は多くありません。たとえ漢字が書けるようにならなくても、漢字を覚えて漢字で学習することにより、言葉の持つ意味を正しく理解できれば、十分とは言えないまでも、それで結構だ、とわたしは考えています。ですから、漢字を学ぶことを目的とする漢字教育ではないのです。

もちろん、できるだけ漢字が書けるのに越したことはないし、じっさいに漢字で学習していれば、いつとはなしに、漢字を覚えてしまうものです。

平安朝の昔から、かなは女手、漢字は男手と呼ばれて、漢字はむずかしいものだと考えられています。たしかに字数が多いばかりでなく、字形が複雑なので、いかにもむずかしいように見えます。

しかし、漢字は文字であると同時に、語でもあるのです。たとえば山・川・花・月などの文字は、英語の mountain, river, flower, moon という語にあたっています。英語の場合、アルファベットだけ覚えても文章を読むことはできません。一語一語、何千という語を学ばないかぎり、書物を読むことはできないのです。

とすれば、漢字は字数が多く、字形が複雑なのは当然のことなのです。「整」という一字など、英語になおせば、「To put (things) in order」という言葉になります。つまり、

「束」が「things」で、「攵」が「put」の意味に当たり、「正」が「order」の意味を表わしているのです。これだけの意味を、ただ一字で表しているのですから、その字形が複雑になるのは当然とわかりましょう。

整という字を構造的に言うならば、木に輪をかけて「束」をこしらえ、これがきちんとそろうように、棒を手にしたたく（攵は攴で、手に棒を持つ意味、牧、教、攻の攵は皆この意味）ことで「正」しくなり、すなわち「整」うのです。

〈3〉漢字——このやさしさとおもしろさ

精薄の子の目に輝き

一年生で、一年かかってもかなが一字も覚えられないという知能の劣った子供がいました。ところが、この子供に、漢字を教えてみたところ、急にその目が輝き、どんどん覚えたのです。

『雲』と『雪』とをまちがいに読み分け、『鳥』と『烏』も間違いに読み分けました。門という字など、ただ一度教えただけなのに、覚えてしまいました。

これには私自身驚きました。しかし、前にも述べたように、記憶するために第一に必要なことは『関心』です。関心がなければ、どんなに学習させても、また学習しているように見えても、実質的には決して学習にはなっていないのです。

知能が低ければ低いほど、抽象能力が劣るものです。したがって、抽象的な文字であるかなには興味が持てず、心がかなに向かないので、「くも」「ゆき」といくら教えたつもりでも、具体的な、あの「空に浮かぶ雲」「降る雪」と結びつかない。ですから覚えられないのです。

ところが『雲』や『雪』だと、よく知っている物であり、言葉ですから、『関心』が持てます。『関心』が持てるから、それが心に残って、読めるようになるのです。

つまり、かなの覚えられない精薄児も、漢字ならほとんど覚える。このことをわたしどもは実験によって確かめています。

絵本の説明も漢字だとわかる

漢字には、以上のような性質があるので、幼児に喜ばれるのです。つまり、むずかしい



漢字の多い絵本——花園文庫の『親指姫』（登龍館発行）から

などというものではありません。努力なし、負担なしで覚えられます。

ですから、幼児用絵本に、かなばかりを使うほど愚かなことはないのです。幼児にわからないかなを使って、わざわざむずかしく、おもしろくないようにしているのですから。もし漢字が多く使われていたら、子供たちがどんなに喜んで本を手にするかしれません。わたしが、このことを絵本を出している人に話したところ、「おっしゃることはもっともだと思います。ただ、それでは世の中のお母

さんたちから文句が出るでしょう。買ってもらえない。それでは出すわけにはいきませんので」ということでした。

先に幼児開発協会の講演会で理事長、井深大氏が『母親が考えねばならぬこと』という話をされましたが、その中で「今日の教育というものは、わざわざ、子供にとってわからなくなる、あるいはむずかしくなる年齢まで待って、それから一生懸命やらせている。子供が受けつける時期をすぎてから、一生懸命詰め込もうとして、親も学校も苦労しているのではなからうか」とおっしゃっていました。この指摘は、漢字教育だけとってみても、正にその通りなのです。

幼児期に学ばせれば、まったく自然に、覚えようという苦労もなく習得し、そのために楽しく読書できるようになるものを、記憶力の衰えた時を待って苦労して学ばせているのです。この誤りから、まず世のお母さん方が抜け出していただきたい。それは子供の将来

のために、想像以上にだいじなことです。

「人間も動物なんだね」

漢字教育をしている幼稚園でのことです。

節分の日に、黒板に「節分」という字を書いて、先生が話しました。「節分とは、季節の分かれめという意味の言葉です。寒い風の吹く、いやな冬、行ってしまうえ、という気持ちで、鬼は外」と言っていて豆をまくのです」とすると、園児の一人が「じゃあ、福は内」というのは「春よ来い」とのことだね」と言ったのです。

その次の日は、「立春」という字を書いて「きょうは立春の日です」と言って、その話をしたところ、こんどはまた別の園児が「こよみの上では春だけれど、まだ寒いね」と言って、先生を驚かしたのです。

言葉は、言葉として説明されただけでは理解しにくく、記憶にもとどまりにくいものです。ところが、文字と共に説明されると、理解しやすく、また、記憶にもとどまりやすくなります。

『節分』が『季節の分かれめ』であり、『立春』が『春の立つ日』であることは、言葉だけの説明では決して理解され記憶されるものではありません。

ところが、漢字と共に説明されますと、幼児でもちゃんと理解し、言葉を漢字と共に記憶し、それを正しく生活の上に使えるようにまてなるのです。

わたしが、一年生に、初めて漢字教育を実験した時のことです。教科書に『どうぶつえん』という言葉が出てきたので、これを『動物園』という漢字に直して教えました。

すると、子供たちが「先生、『動物』って『動くもの』って読めるね」と言っています。

わたしは、「ああ、よく気がついたね。君たち、チューリップやたんぽぽや桜の花が生き

物だってこと、知っているだろ。でも、お花は動けないね。生き物には、だから、動ける物と動けない物というわけだ。それで、動ける物は『動く物』と書いて『動物』ということにしたんだよ」

すると、子供たちは、初めて聞くという顔をして目を輝かして聞いていましたが、「先生、じゃあ、とんぼもちょうちも動物なの」と、驚いたように尋ねました。

「ああ、そうだよ」と答えると、他の子が「じゃあ、金魚もだね」と言います。子供たちは、とんぼやちょうち虫であって動物ではない。水の中に住むものは魚であって動物ではない、と思っていたのです。

これは、子供に限りません。おとなでも、『動物』を『哺乳動物』に限って使う傾向があります。ところが、最初から漢字で学習すれば、一年生でも正しく理解するのです。

最後にある子供が言いました。「先生、人間もやっぱり動物じゃあないの」

応用問題を解く鍵も漢字力に

石井方式漢字教育を行っている小学校では、一年生でも算数の文章題（応用問題）が実によくできます。クラスの大半が満点です。文章題をやるのが楽しくて仕方がないのです。普通の学校で、文章題の成績が悪いのは、問題を解く力がないためではなくて、かなばかりの文章なので、読むのに苦労して、読んでも意味がよくわからないので、式を立てることができないのです。

それは文章題の点数 0 の子に、その問題の文章を読んでやってからやらせると、すぐわかります。たいてい、すらすらと式を立てて、正しく計算してちゃんと答えを出します。文章というものは、全体をすらすらと読み通さないと、その意味がわからないものです。ですから、一字一字、かなを拾い読みしていたのでは、何をどうしろと言われているのか、わからないのです。つまり、問題を解く力はあっても、式が立たないのです。

ところが、目で見ただけですぐわかる漢字を多く使った文章だと、すらすらと終りまで読み通せますから、すべてうまくいきます。漢字教育を取り入れたクラスのほとんどの子供が満点をとれるのはそのためです。

文章題はきらわれがちですが、その文章がすらすら読めて意味がよく解れば、単なる計算問題よりずっとおもしろくて好かれるはずで

このことは、算数の文章題に限ったことではありません。理科の学習でも、社会科の学習でも、かなばかりで書かれているために読んでも意味がわからないとか、反対に、漢字が多い参考書だと、漢字が読めないなのでその参考書を十分に活用できないとか、そういうことのためにできない場合が非常に多いのです。

この意味でも、早い時期に漢字力を養っておくと、漢字を多く使った、本格的な書物を早くから読むことができて有利です。幼稚な書き方の本よりも、本格的な書物の方が、読

むかええあるならば、おもしろく読める。おもしろく読めれば、読めない子との間に格段の差が生じ、その差が拡大していくことも当然でしょう。

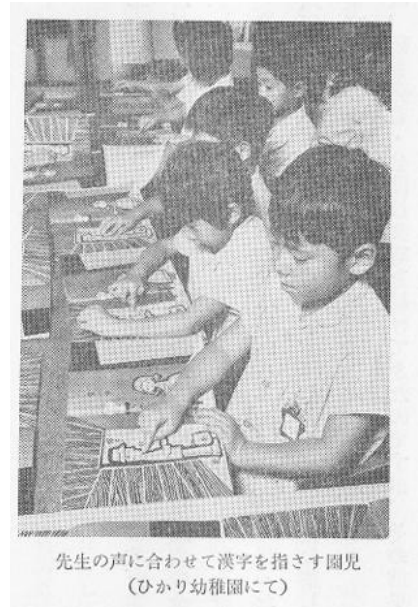
近く工学修士になるはずの私の長男は、石井方式漢字教育の実験第一号で、幼稚園のころ、すでに小学校四年生くらいの本だったら、らくに読めるようになっていました。

このため、小学校の低学年のうちから、わからないことは、自分から百科事典を引き出して調べるようになり、特に興味を持っていた理科方面の知識は、学校の先生を驚かせていました。

かれは「自分が数学や理科が得意になったのは、父の漢字教育のお陰だ」と語っています。漢字教育が国語力を育て、その国語力が機械工学の世界のおもしろさを私の長男に見せてくれたのです。

先に引用した「科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、国語の力があ
るのだ」という朝日新聞の社説は、単なる理屈ではなくて、事実の裏付けを持った主張な
のです。

第3章 漢字と仲よしにさせるには



先生の声に合わせて漢字を指さす園児
(ひかり幼稚園にて)

〈一〉石井式漢字教育の歩み

どのように始まったか

石井方式は、昭和二十六年に発表されました。当時わたしは、八王子市教育委員会の指導主事をしていましたが、東京教育大学で行われた全日本国語教育協議会の全国大会総会で、意見発表をしました。それは、長男で行った実験を基にした、単なる意見発表に過ぎませんでした。それから二年後の昭和二十八年から本格的な実験に移ったのです。その実験は、翌二十九年には、中間発表として、二十六年に発表した意見の正しさを裏付けるに足る報告を、東京都教委の機関紙『教育時報』に発表しました。

以後、毎年のように、研究発表・公開授業等が続けてきたのですが、その結果、わたしの意見に感心したり、教育の成果を賞讃してくれる先生方は増えました。けれども、わた

の方法を実践しようとする先生はなかなか現れませんでした。

昭和三十六年、『私の漢字教室』（黎明書房発行）で、二十八年から三十五年までの実験をまとめましたが、この頃から、全国のあちこちに、実践する先生がぼつぼつと現われ始めました。

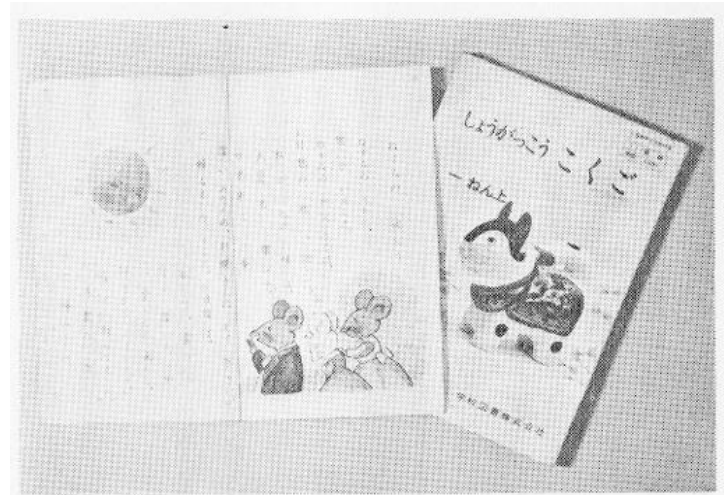
新潟県亀田町の袋津小学校は、笠原校長を先頭に全校教職員挙げて、石井方式の研究と実践とを押し進めてくれました。わたしは、昭和三十七年の二月以来、数回訪問しましたが、訪問のたびにその研究と実践は向上のあとが見え、その後、統合によって廃校となり、実践が中止されましたが、石井方式実践校の貴重な参考資料となっています。

静岡県熱海市の桃山小学校は、昭和三十八年に当時の岩崎校長の熱心な提唱によって始められ、その後、校長は何回が変わりましたが、今も続けられています。神奈川県立教育センターでは、この桃山小の研究に注目し、たびたび指導主事を派遣するなどして、神奈

川県の実験学校と共通の問題により、石井方式による指導の結果と、文部省方式による指導の結果とを比較し、考察を加えるなどして、これをたびたび機関誌に発表しています。公立の教育機関が、このような努力を払っている例は他にありません。

静岡県富士市の須津^{すづ}小学校の実践も、数年に及んでいます。ことに、同校は、ここ三年にわたって、富士市教委の研究指定校として、石井方式実践の跡を、公開授業と共に広く発表しており、関東、関西からも見学に訪れる先生が少なくありません。近畿大付属小学校の全校実践は、昭和四十二年に始まりました。わたしは校長檜崎浅太郎先生の依頼を受けてたびたび訪問していますが、大きな期待を寄せているものです。

その他、北海道から四国、九州に至るまで、熱心な実践家が表れて、この研究をいろいろな面から進めています。しかし、残念な事には、石井方式漢字教育を進めていくための拠り所となる教科書がありません。そのため、検定教科書の全ページにわたって、かなの



貼り漢字をした小学校一年生の教科書

部分に用意した漢字を貼りつけています。この作業は準備が大変です。改めるべき漢字の選定——これは先生方の最も神経を使う仕事です。漢字の印刷——大方はガリ版によって、手刷りします、しかも、その漢字が、かなの部分で過不足なく隠すようであればなりません。また、そのように正しく貼りつけ作業ができるような指導とその手順が大変です。うっかりしますと、「私」が、「わ」だけを隠して「私たくし」となったり、「た」だけを隠して「わ

私くし」となったりしかねません。

石井方式を実践して下さる先生方は、ことなかれ主義の校長などから敬遠されながらも、ただ、子供たちの幸福だけを考えて、このような苦勞をあえてしているのです。

制約の少ない幼稚園に注目

数年前、わたしは求められて、使用漢字についての石井案を文部省に提出しました。わたしは、一年生に最も多く提出すべきだと思っっていますが、それはすぐには容れられるはずがないと思い、百十二字を選んで提出しました。

その後、「今までの四十六字の二倍、九十時くらいに落ち着きそうだ。ここまでいけば大成功ですよ」と文部省の先生が教えてくれましたが、結局は前述のように、一年生が七十六字になってしまいました。これは現状を変えることを喜ばない現場代表の先生の意向

を反映した結果なのです。

決定してしまったあとですが、その先生が「これで成功すれば、次の改定ときには、百五十字にもっていくこともできる。そしてそれに成功すれば、その次には、三百字にできる……」と言われました。

歯がゆいけれども、これはもつともな意見にちがいありません。文部省としては、いかに教育効果を目指すとは言え、簡単に変えることは許されません。くるくる方針を変えてばかりいたら、大変です。そう思ってたしも。あせらないことにしました。

とはいっても、手をつかねていたのでは、事態は動きません。全力を尽くして引っ張っても、ゆるゆるとしか傾かないのですから、力を出し惜しんでいたら、世の中は少しも動きません。

そこで「学校教育よりそれ以前の幼稚園教育を考えよう。これを前進させれば、自然小
学校も前進しないわけにはいかない。幸い、幼稚園教育は、小学校教育ほど制約を受けていない……」と考えました。

こういうわけで、今、幼稚園の石井方式漢字教育が始まったのですが、この新しい作戦を考案し、計画し、実践して下さったのが、大阪市の小路幼稚園の井上文克園長です。

井上先生が私の著書を読まれたのは、昭和四十二年の十二月の末のことです。読み終わってすぐ、取る物も取りあえずという形で上京し、わたしの家を訪ねてくれたのです。その時先生は、「石井方式の普及、日本の教育の改革は、まず幼稚園から手をつけるべきではないか、幼稚園は、それに最も適した場である。わたしにお任せ下さい」とおっしゃったのです。

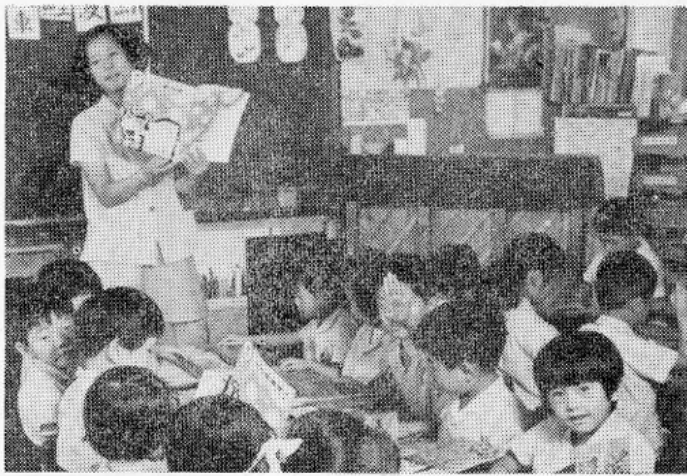
その後、大阪で準備された会にたびたび出席して、多くの園長先生方に石井方式漢字教育の実践について話したり、奨めたりすることになりました。

「幼児が漢字を覚える？　ほんとだろうか。ほんとだとしても、それは一部の幼児に過ぎないのではないか」そういう考えの園長が多かったと思います。しかし、わたしと井上先生の熱意が通ってか、実践に踏み切る幼稚園がどんどんふえていき、たちまち、数十の幼稚園がこの教育を力強く押し進めてくれるようになったのです。

漢字を使って “お話” を見せる

抵抗は初めからありました。ある園長は「わたしは、幼稚園でかなを教えているのさえ苦々しく思っています。まして、漢字を教えるなんて、とんでもない暴挙ですと、顔色を変えてわたしに食ってかかりました。

「わたしも、今までのような漢字教育なら反対ですし、殊に、幼児にかなを教えるのには大反対です。ですが、だまされたと思って、二十分ほどでよろしい、園児をわたしにお



先生と一緒に漢字の絵本を読む園児（ひかり幼稚園にて）

貸してください。わたしの『漢字教育』というものをお目にかけます。その上でご批判を頂きたいと思います」

わたしはこう答えて、実際指導をしてみせました。例の、「お話をしてあげましょうね」と言っ、園児たちにお話をしながら、その中に出てくる言葉を黒板に書きつけていく方法です。

十分から十五分の話の中にくり返し出てくる言葉を黒板にいっぱい書きつけました。その漢字は全部で三十字くらいあったでし

よう。話が終わって、わたしが黒板の漢字を指さしますと、皆、元氣よく読みます。ずっと前から知ってたよ、というような顔で読む園児たちの様子を、じっと見つめていた園長は、指導が終わって園長室に引き上げるとすぐに言われました。「このような漢字教育なら、うちの園でも早速やらせて頂きます」

漢字教育と言うと、すぐ漢字の詰め込み教育だと思われるところから、言下に「とんでもない」と言って否定されがちです。また、「漢字教育より先に、すべきことがある」とも、言われます。これに対してわたしは言うのです。

「先にすべきことがあるなら、それを先にやって下さい。ただ、そのすべきことに漢字をお使い下さい。とくに『漢字を教える』ではありません。『漢字で教える』のです。漢字で教えた副産物として、幼児が漢字を覚えることを期待しているだけです。ですから、覚えなくても一向にかまわないのです。しかし、たとえ覚えなくても、見せておけば、そ

れだけのことはあろう、と考えているのです」

「ローマは成る日に成るにあらず」です。漢字もまた読める日の前に、読めないけれども、読めるための下地となる『読み』がなければなりません。『漢字で教える』教育とは、そういう下地になるためのものです。

くり返して見る幼児の喜び

わたしたちは、『容易に覚える』ということ、安易に喜んでいてはまちがいます。幼児は気が向けば（『関心』をもてば）どんな漢字でも一ぺんに覚えてしまいます。しかし、容易に覚えたものは容易に忘れることも、免れがたい事実です。

なかなか覚えなかったが、ようやく覚えた——こういう覚え方をした場合は、容易に忘れないものです。記憶が長持ちすれば、その間にまたその漢字に出会う機会にぶつかって、

復習しますので、さらに記憶は確かになります。そう考えると、「物覚えの悪い子は幸いなり」と言えそうです。

覚えようと覚えまいと、忘れていようと忘れてまいと、とにかく使う機会があったら、一つの漢字を何回でもくり返して提出し、読む機会を与えることが必要です。

皆、よく覚えたから、もうよろう。——こうした考え方は、漢字教育に関する限り誤っています。つまり、皆、よく覚えたから、よけい使ってやろう、出なければなりません。

漢字は、「覚える」ことが目的ではなく、「覚えた」あと、「使う」こと、「読む」とが目的です。幼児が覚えたからこそ、わたしたちは、幼児に対して漢字をほんとに「使う」ことができるわけです。

つまり、親も教師も、幼児に漢字を使って見せる機会があったら、何でもかんでも使って、幼児に漢字を読ませる機会を、できる限り多く作ることです。

幼児は、その重大な特性の一つとして、「くり返し」が好きだ、ということがあります。三歳ぐらいまでの幼児は、くり返して飽きることを知りません。ですから、幼児の好むお話には、必ずくり返しがあります。幼児がそのくり返しを好むから、そういうお話が昔からずっと語り継がれてきたのでしょう。

「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけたものは何ですか」に始まる問答は、三回くり返されます。この三回くり返されるところが、幼児にはたまらなく快い聞きどころなのです。そして、くり返しのある物語を、幼児は、くり返しくり返し聞くことがまた、この上もなく好きです。すっかり覚えてしまっても、なおそのお話をせがみます。

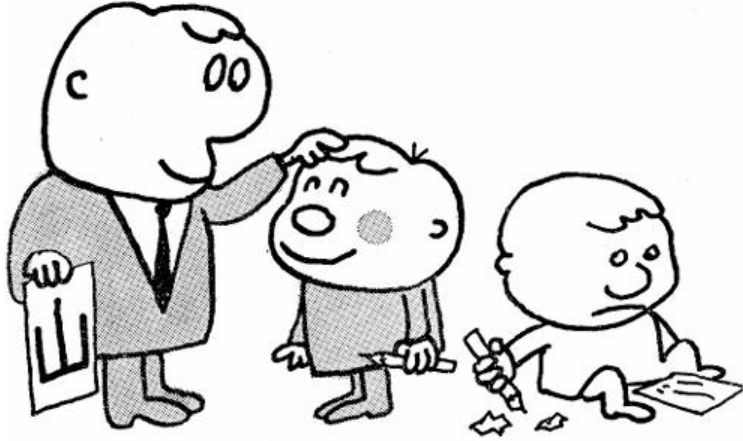
こういう幼児のことですから、漢字の反復練習もまた大歓迎します。「よく覚えてしまっているから、もうおもしろくないだろう」と気を回して反復を遠慮するのは、おとなの分別で、幼児は、「よく覚えて知っている字だから、得意になって読める」のです。

この「くり返し」を好む性質が「心の若さ」の正体です。精神が老化していきますと、「くり返し」がたまたまなくいやになってきます。ですから、肉体は、これを使うことによってその若さを保つように、我慢して幼児の相手になり、「くり返し」をくり返してやることは、子供のためでもあり、おとなが自分の「心の若さ」を保つのに役立ちます。

たくさん覚えるほどよい効果

幼児の漢字教育で、幼児があまりよく漢字を覚えるので、「こんなにできるようになった、小学校の漢字学習がつまらなくなりはいしないだろうか」と、心配されるお母さんや幼稚園の先生がよくいらつしやいます。

これもまた、老化した心で、若々しい心を推し量るところからくる見当違いです。



成功の喜びは幼児の能力を向上させる

すでに述べましたように、「若い」幼児の心は、「くり返し」を飽きるどころか歓迎します。それに、「できる」から楽しいのです。できて楽しいから、気に入った遊びに夢中になるように一生懸命やります。一生懸命やるからますます能力が向上します。わたしは、小学校の一年生をたびたび指導していますが、漢字の書き方練習の時、わき目も振らずに書いているのは、必ず上手な子供です。下手な子供は、一字書いてはため息をつき、一字書いてはよそ見をし

ています。

うまく書ける子は、それほど一生懸命にやらなくてもよいと思うのに、一生懸命にやり、下手な子は、一生懸命やってほしいと思うのに、一生懸命になれないのです。

成功の喜び、上手く書けたという喜びを知らない子供には、それを求めて努力するだけの意欲が燃えないのです。下手だからこそ練習しなければいけない、ということがよくわかるわたしもおとなでさえ、やっぱり下手なことはついおっくうになるものです。

幼児も、漢字が得意になればなるほど、小学校へ行ったら、わかる楽しさから、なお一生懸命勉強します。できすぎによる心配など決してありません。

“できなくてこまる”——これこそほんとに困った悩み、容易に救いがたい悩みです。というのも、できない子は、いちばん励みになる成功の喜びというものを知りませんので、やる意欲が出ないからです。やっても楽しくないのです。意欲のないものが、なにを

しても。楽しいはずもうまくできるはずありません。こうして悪循環が起るのです。

悪循環はどこかで断ち切らなければなりません。そして、どこかが好転すれば、全体がうまくいくようになるのです。たとえば、何かを褒められた、ということでは、いい気持ちになった。そこで子供に“やる気”が出た。そのため、いままでよりよくできた。それがまた認められて褒められた。——これで、良い循環軌道に乗ったわけですが、こうなれば、もうあとはどんどん向上線の一途をたどることになります。

たしかに、この図式通りに軌道に乗せることは、実際にはなかなか容易ではありません。しかし、子供の長所を見つけ出し、子供の能力を引き出すことが“教育”だと考えるおとななら、やはりこの軌道に乗せる努力をしなければなりませんし、努力すれば必ず実りは期待できます。



右側通行も漢字で教える

見る機会をこうしてふやす

前に、「漢字教育より先にすべきことがある」という批判をする人が多いけれども、それに対しては、「漢字教育は、先にすべきその教育を漢字でするので」と答えるのだと申しました。『先にすべきもの』とは、集団の中での幼児の生活の確立とか、情操教育とか、そういうことを指しているのかと思います。

ところで、わたしたちのいう漢字教育というのは、漢字そのものを教えるので

はなく、右のようなことをがらを指導するに当たって、そのポイントになる言葉を漢字で示しながら話を進める教育なのです。

たとえば、廊下や道路での『右側通行』の話をする場合でも、ただお話しするよりも、これらの漢字をカードに書くなり、黒板に書くなりして、聞いている子供たちにこれを見せながら話すのです。

子供たちに身近なことから表わすこの程度の漢字は、ほとんどの子供がすぐ覚えます。また、話そのものも、ただ話した場合よりも、漢字が示されたことによって、子供たちの意識を集中させ、話の内容を鮮明に印象づけます。

しかも、もしその翌日、同じようにしてこれらの文字を見る機会を与えるならば、特に教えなくても無言のうちに、前日の『右側通行』の話が子供の心によみがえり、ひとりでに復習され、『右側通行』の生活指導が徹底されるのです。

〈2〉石井式漢字学習法の五つの原則

幼児期に漢字を与える

すでに述べたように、漢字は幼児に喜ばれています。幼児は漢字を楽しんで覚えていきます。それなのに、どうして小学校や中学校では、漢字が嫌われ、漢字学習がうまくいかないのでしょうか。

これは不思議のようですが、実は当然のことなのです。つまり与えられたものは、それが善悪難易の区別なく、言葉も行動も、すべてこれを覚える能力は、幼児期が最高なので、すから、幼児なら漢字がどんどん覚えられても、小学生や中学生になると、そのようには覚えられないからです。

ですから、わたしは、幼児の生活環境に出てくる漢字は、幼児期のうちに覚えさせるようにしなければいけないと言うのです。漢字を覚える能力が衰えるようになってから、苦しませて学習させるのは不合理だということです。

しかし、小学生や中学生になってから漢字を教えるにしても、あとで詳しく述べるような、もっと楽しく学習できる方法はあるのです。ただ、文部省がそういう指導法を取り上げていませんし、したがって、先生たちも知りませんし、試みようとしてもしないだけのことです。

昭和四十六年の四月から、小学校の教科書が変わって、今まで六年間に学習していた八百八十一字の漢字が百十五字ふえて、九百九十六字になります。

ところが、これが決められたのは、三年前の昭和四十二年八月でした。その時、当時の朝日新聞に、『漢字学習に一言』という、ある小学校長の意見が掲載されました。それは、「教育課程改定に関する中間報告によれば、小学校で扱う漢字を千字以上に増加するとい

う。今まで八百八十一字の漢字が覚えきれずに悩んでいるのに、この上ふやすとは何事か。この上教師と児童を苦しめるのはやめてもらいたい」という意味のものでした。

これは右の校長の特別な意見ではなく、大方がこういう意見でした。わたしはこのとき、日本教育新聞から依頼されたのを機会に「漢字は早く多く学ばせよ」という表題で寄稿しました。その中で、こう意見を述べました。

——考えていただきたい。子供たちが社会に巣立った時、生活上必要な漢字は、当用漢字と呼ばれるものだけでも千百五十字あるのである。その他、必要な地名・人名漢字を加えれば、優に二千字は越えよう。つまり、この二千の漢字を知らないと毎日の新聞記事は読むことができず、社会人として十分な生活を営むことは不可能であろう。

とすれば、漢字の学習は、それがどんなにむずかしいものであろうと、社会生活に必要なだけの漢字を学習させ身につけてやることに努力を傾けるのが、教育に携わる者の当然

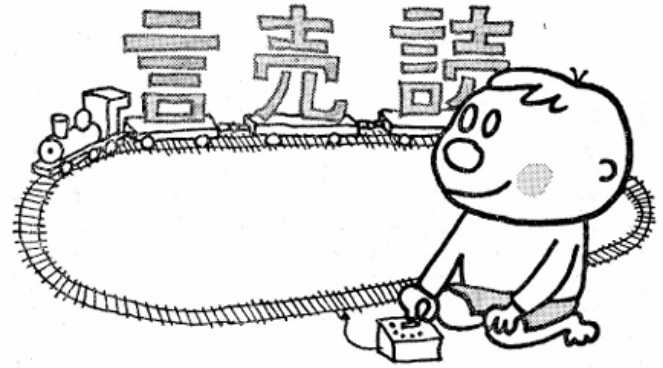
の義務であろう。

そういう見地に立てば、小学校で教える漢字を千字に増やしても、まだ十分とは言えないのである。生活に必要な能力を養うためには、児童も教師も苦しむのが当然のことであって、この上苦しめてくれるなどと弱音を吐くことは許されない。――

たくさん漢字を関連づけて覚える

さらにつづけてこう述べました。

——「学習する漢字がふえれば、それだけ学習負担がふえる」と一般に考えられている。常識的にはいかにもそのように考えられるが、実際にはそうではないことが、実験してみるとわかる。小学校の一年生に提出すべき漢字は、現在四十六字と決められている。ところが、わたしは過去十四年間、この五倍から十倍に当たる三百ないし五百字の漢字を提出



漢字は関連づければ、たくさんのものを楽に覚える

してきた。そうすると、学習負担も五倍から十倍になるはずだが、実は以前とほとんど変わりが無いのである。それもわたしだけではなく、だれがやってみてもそうなのだ。漢字は、限られたわずかな字を、一字ずつばらばらに学ぶ（現在の学校の漢字学習法）よりも、関連のあるものを、たくさんいっぺんに学んだ方が覚えやすいのである。――

たとえば、今の学習法では、文部省の漢字配当表にしたがって、「読、売、言」という関連のある漢字を、二年、三年、四年と、三年間に

わたり、ばらばらに学習しています。

こんなことをしないで、この三字を同じ学年で教えた方が効果のあることは実験済みです。わたしは、一年生にこの三字を教えました。その習得率は、四年生の習得率よりもずっと良かったのです。

一年生の漢字が年間四十六字では、互いの間に関連のあるものがどうしても少ないのです。三、四歳の幼児でしたら、関連がなくてもよいのですが、もう理解力の出ている一年生にこういう学習をさせると、単に覚えにくいばかりでなく、これからさらに伸びる理解力の発達を妨げる危険もあります。

わたしは、「小学校六年間に学習すべき千字のうち、その半分の五百字を一年生に提出せよ」と新聞に書きましたが、それは記憶力の強い幼児期に最も近い一年生だからということ、このように数を多くすれば、関連のある漢字がふえて記憶しやすいからというこ

との、二つの理由があったからです。

では、どのような関連を持たせて学習させるかが問題になります。そこで作りだしたのが、**『体系的合理的漢字学習法』**で、それはこの本書の第三部で述べます。

最初からほんもので学ぶ

すでに述べたように、学校の漢字教育は、根本的には教育の時期を失っています。方法的には無策といってもいい **『ばらばら学習』** をしております。そして、そのほかにもう一つ大きな誤りを犯しているために、なお効果が上がらないのです。それは、国語教育が持つ致命的な欠陥なのですが、この欠陥が明治以来のものだけに根が深く、人はみな誤りだと思いにくいようです。その誤りとは、学校・山・川というようなありふれた漢字、そこにあるものの名を示す漢字でも、最初はこの **『かな書き』** をして、決して漢字では教えない、

ということです。

なにごとでもそうですが、最初に身につけたものを途中で変えるには、大変な努力がいります。初めの習慣をつけるのに要した時間より、何倍も、年齢によっては何十倍もの時間をかけなければ、新しい習慣は身につかないのです。それはお国訛りのことを考えてみると、よくわかりましょう。

ですから、がっこう・やま・かわという表記で教えるくらい愚かな学習方法はないのです。幼児はいうまでもありませんが、一年生でも「がっこう」より「学校」の方が、「やま」「かわ」より「山」「川」の方がはるかに覚えやすいのに、学校では依然としてこの愚をくり返しているのです。

しかし、基本的には、じっさいに困難であったとしても、やはり最初から **『ほんもの』** である漢字で教えないといけない、という態度を堅持することが必要なのです。

わたしは、昭和二十八年から五年間、最初から「ほんもの」で学ばせるやり方と、最初はかなで学ばせる普通のやり方を比較実験してみました。

後者のやり方だと、一般によく言われるように「テストすれば書ける漢字でも、作文やノートにはなかなか使えない」「木（汽）車が木（来）た、というような誤った使い方をすることが多い」などの欠陥が出ますが、前者の場合は、絶対と言っていいほど、そのような欠陥は出ません。

「学校」という漢字を習ってから、やはり「がっこう」と書くのは、初めに「がっこう」と書く習慣がついてしまっているからです。つい「がっこう」と書いてしまうのは当然の結果でしょう。

ところが、最初から「学校」と学んだ子供たちは、たとえ書く能力が不十分でも、「がっこう」とは決して書きません。手本になる字を捜し出してそれを見ながら「学校」と書

きます。ですから、書くことによって書く力をさらに伸ばしていきますが、先に「がっこう」と習った子供たちは、漢字を使いませんから、一時的には練習で書けるようになった漢字でも忘れてしまいます。

「木車が木た」というような漢字の使い方をする欠陥は、最初から「汽車が来た」と学んでおれば起こらないで済むものです。

初めに「きしゃがきた」「つみき」などと、かな書きで教え込み、あとになって「つみき」が出てきます。すると子供にとっては、きり木になるでしょう。そこで、「きしゃが「木しや」になるのは当然なのです。これでは学習する子供もかわいそうですし、教える先生もつらいわけです。

自然に覚え自然に使えるように

言葉や文字の学習は、知識の段階に止まっていたのでは「ほんもの」ではありません。わたしどもの英語のように、日本語で考えたことを、英語に直して話すようでは「ほんもの」ではないのです。ひとりで口をついて出てくるようではなりません。

ですから、「テストすれば書けるが作文には使えない」ようでは、ほんとの漢字力とは言えない訳です。使おうと思って使うのではなく「ひとりで使う」のでなければなりません。

そのためにはまず、「最初はかなで、漢字はあとで」というやり方は絶対にやめなくてはなりません。

つぎに、「ひとりで覚えられる」幼児期に学ばせることが是非必要です。学ぼうとして学んだものは、よほど反復練習しても、使おうと意識して使わなければ使えませんが、

ひとりでに覚えたものは、よく身について、ひとりでに使えるものだからです。

わたしたちは、日本語を使う場合、文法など全く考えないで使いますが、それでいてちゃんと文法に適っています。もっとも、はじめに文法があつて、それに合わせて日本語ができたわけではありませんから、これはあたりまえのことですが、とにかくこのような能力は、①生まれた時から、いつも日本語に接していて、②それがひとりでに身についてしまひ、③いつもそれを使っているから自分のものとなったのです。

漢字も、こうした日本語の学習方法で学習すれば、ひとりでに身に付きます。ところが、①学校でその漢字が初めて出てきた時だけ練習し、②先生から覚えろと言われて、テストに間に合う程度だけやり、③テストが終わればもうほとんど使わない、これでは漢字能力のつきようがありません。

「宇宙」というのは、中学生になって初めて学習する字です。ところが、この文字は、

テレビにはたびたび放送されるし、また新聞にも大きな活字になって出ます。ですから、幼児でもいつかひとりで覚えてしまっています。

ある幼稚園で調べてもらったところ、かなりの子が読めるということでした。小学生など調べるまでもないでしょう。とくに学校で教えなくても、このように、見聞きしていれば、いつともなく覚えてしまうものです。

だから、家庭や学校で、もっと計画的に、漢字が子供の目に触れるように配慮するならば、特に学習させなくても、子供たちは、きわめて容易に漢字を覚えるはずです。

長期にわたって繰り返し練習

先に述べたように、学校では、初めて出てきたところでその漢字を学習させるだけで、あとの反復練習というものが全くありません。それでももうわかった、というわけでしょう

が、これではそういう漢字があるという、きわめてあいまいな単なる知識に止まって、
「使える」能力にまでいくはずがありません。

初めて出てきたところで、どんなに練習してみても、まだ、それを使うところまでいけないことは、だれでも、他のことで経験しているはずです。

漢字力も、運動能力を養うのと同じように、やはり長期にわたって、くり返し練習しなければ、ほんとうの能力にはなりません。初めて出てきたところで、朝から晩まで毎日練習を一週間くらい続けたとしても、それで終わっては確実に身につきません。

まして、テストのための一夜漬けは、永続的な能力を養うことになりませんから、学校でさせるべきものでは絶対にはないのです。ところが、現実には、この避けねばならないことが一般に行われ、テストが済めば、先生も生徒もやれやれと言った顔です。大きなまちがいといわねばなりません。

その時だけ、一時的にできるようになっても、それだけでは、真の意味で将来のためには何にもならないのですから、そういうむだを止めて、たとえその時にはできなくても、いつかはできるようにしてやる——それが身について、それが使えるように育ててやるのが「教育」というものでしょう。

漢字の学習は、算数や理科や社会科の学習とは、本質的に違ったものです。算数や理科などの学習は、理解するまでが問題ですが、漢字の学習は、それ以後の方が問題なのです。

わたしはかつて軍隊で射撃が得意でした。「射撃もっさり」という言葉があつて、「射撃はのろまな人間がうまい」という意味ですが、とにかく、射撃練習のときが私は一番心が安まりました。

射撃は反復練習によつてだれでも上達しますが、やはり一応の基礎知識がなくてはだめです。わたしの頃は、古い山型の照準でしたが、これがどういう位置になった時、引き金

を引くか、から始まって、銃の持ち方、銃把の握り方、引き金の引き方、太陽がどちらにあるか、気候気象の影響等々、理解し記憶しておけなければならないことがたくさんあります。

これらの理解、記憶は、実際体験を重ねていつて初めてできるものですが、理解し記憶してからの反復練習がそれ以上に大切なのです。

“一応やってみて理解できた、では次に進もう”というのは算数や理科や社会科の学習方法です。“一応やってみて理解できた、さあ、これからが本番だ”というのが射撃の練習です。そして、漢字学習はこの射撃の練習と同類です。そして、学校の漢字教育は、この“本番”が欠けているのです。これが“ほんもの”にならない理由です。

〈3〉幼児と日本の昔話

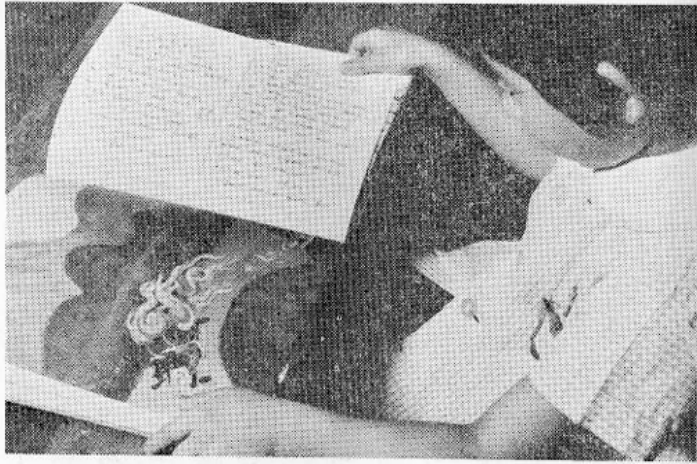
早く自分で読むようにさせたい

「現代っ子の心はわからない」と言って嘆く親の多いこの頃です。しかし、現代っ子の心は、今の世の親の心の反映です。

今の世の親たちの物の考え方、日常の行動が、すべて現代っ子の心や行いを育てたのです。今の子供の心の中にどんなに悪いものがあるにしても、それは親の負わねばならない責任です。

戦後、わたしたちは、わたしたちの心を育ててくれた古い物語を捨ててしまいました。それで、今の子供は、愛や正義を貫き通す勇気を知らないのだと思います。

花咲爺さん、桃太郎、舌切雀、カチカチ山、猿蟹合戦、これらの昔話は、幼児たちの心



カチカチ山を楽しげに読む園児（ひかり幼稚園にて）

を楽しい想像の世界に引き込んで、日本人の心を育てたのです。

わたしは、小学校の一年生に、毎日一つずつ話をしてやったことがあります。あとで、どの話がおもしろかったかを調べました。わたしはそれまで、日本の昔話はどろくさいと思われ、西洋の童話の方がずっと人気があると思っていました。ところが、じっさいにはその反対で、いちばん人気があったのは、意外にもカチカチ山でした。

たしかに、「ここはね、カチカチ山と言っ

て、カチカチ音がするんだよ」と話し出すと、子供たちは、ほかのときとはくらべものにならないほどおもしろそうに、ニコニコしながら聞き入りました。カチカチという音がくり返されることも、愉快だったのでしょう。それにやさしい兔が、いたずら狸を、くり返しやっつけるのが子供の正義感を刺激し、子供たちは愉快でたまらなかったのでしょう。日本の昔話は、やはり、日本人の心を育ててきた貴重な文化遺産なのです。子供たちの心に、愛と勇気をしみこませる昔話を、ただ聞かせてやるだけでなく、早くから自分の力で読ませ、楽しませることによって、子供たちを育ててやりたいと思います。

人生最高の楽しみを与える

わたしは、このごろ、映画を観に行く暇がありませんし、あっても、書物を読む方がずっと楽しいので、結局観ないことになります。

しかし、若い頃はよく観ました。特に、感激して読んだ文学作品が映画化された場合には、期待して観に行ったものです。が、ほとんどのものに幻滅を感じたように思います。映画にはえいがだけのもつ良さがあるのですが、それぞれの人が心に描くものの美しさを、現実表現することはまず不可能といえましょう。どんな名優が、どんな名演技を見せてくれても、やはり幻想像の美しさにかなうものではないようです。

殊にわたしは、小学校にはいる前から、本を読むのが好きでした。絵本よりも、絵のない物語の方が好きでした。これは、幼い時に母親の物語を聞いて育ったためだと思います。無限に想像をくり広げながら聞く楽しさ、それが物語を読む楽しさにつながったのだと思います。

そして、読み終わったあとも、その物語の世界に没入し、物語の中をさまよう楽しさを味わったものでした。

幼年倶楽部という雑誌が創刊されたのは、わたしの就学前だったと思いますが、不思議なことに、創刊号にあった「一番楽しいお正月」から始まって、二十六番目の「幼年倶楽部が日本一」に終わる「じり取り」など、いまでもすら口を突いて出ます。

幼い時にくり返し自分で読んだものは、それほど強く頭に焼き付いてしまうのです。ですから、幼いうちに読書力を育てて、心の糧となる書物を、心の欲するままに読ませてやりたいと思います。

「情操教育の季節」への備え

大脳生理学の立場から言えば、情操教育に適した時期は十歳ごろから以後だとされています。数学の岡潔先生が、その著『風蘭』や『月影』（いずれも講談社現代新書）で、この時期を「情操教育の季節」と呼び、大脳生理学の時実利彦先生は、この岡先生の命名を



人間が人間であるためには読書が何よりも大切

「いみじき表現だ」と評しておられます。

この時期に、書物を通して、人の心の美しさに触れさせ、これを理解させることが、何よりも重要な「情操教育」「道徳教育」であると思われます。

子供がひとり書物を開き、これに相對する時、書物は親しく子供に語りかけ、目に見えない栄養分によって子供の心を育ててくれるのです。

ですから、ほんとうの情操教育が「情操教育の季節」に自然に行われる準備

としても、その季節以前、つまり幼児期に、読書力の基礎を養っておくことが、その子の一生のために、何にもまして大切になってきます。

書物のことを「本」とは、なんという適切な呼び方だろうと思います。人間を木にたとえ、書物をその根にたとえ、「本」と呼んだのでしょうか。人間は根である書物により成長できるわけです。

書物が私たちにとって真に「本」であるためには、それを読む力がなければなりません。その意味では、人間が人間であるためには、読書力がなければならない、と言えます。

したがって、読書力の基礎である漢字力の育成は、その重要性から言っても、またその本質から言っても、何よりも優先しなければならないということができます。簡単に「漢字より先に教えるなければならないことがある」などと言って済ませるべきものではありません。